

平成30年11月30日

陸前高田市議会議長 伊藤明彦様

教育民生常任委員会委員長 鵜浦昌也

平成30年度 管外行政視察報告

教育民生常任委員会の管外行政視察の概要は、下記のとおりでありますので報告します。

記

- 1 期 間 平成30年10月24日（水）から
平成30年10月26日（金）まで

- 2 行政視察地 ①大阪府高石市（人口57,900人 H30.10.1現在）
及び研修項目 ・子育て支援事業について
②和歌山県海南市（人口51,208人 H30.10.31現在）
・子育て支援アプリ「すくすく海南」について
③稲むらの火の館
・防災教育について
④和歌山県立自然博物館
・自然をテーマとした生物並びに標本の資料展示等について

- 3 出席委員等 委員長 鵜浦昌也 副委員長 大坪涼子
委員 蒲生 哲 委員 丹野紀雄
委員 菅野 稔 委員 及川修一
随 行 事務局長 佐藤由也
主 任 石川聖恵

- 4 行政視察概要 別紙報告書のとおり

教育民生常任委員会行政視察報告

教育民生常任委員会は、大阪府高石市をはじめ和歌山県の海南市と有田郡広川町において行政視察を行いました。

○高石市

1 子育て支援事業について

まちづくりのキャッチフレーズに「子育てするなら、高石市」を掲げる大阪府高石市。人口は約5万8千人。大阪府の南部に位置し、大阪の中心部から約20分、関西国際空港から約30分、和歌山市から約50分の距離にある。

西部の海面埋立地には臨海工業地帯が広がり、道路網や鉄道が整備。都市部に隣接した住宅地としての好立地を生かしながら子育て支援を重点施策に事業展開し、ここ数年の出生数の増加につなげている。

子育て支援のひとつは、市内の小中学校区に認定こども園や保育所、幼稚園のいずれかの施設を設置。各家庭にとって、身近な場所に乳幼児を預けることができる。

具体的には、小学校就学前までの子どもを保護者の就労状況にかかわらず教育と保育を一体的に行ってもらおう認定こども園（私立）が9施設設置。この施設には、施設に通っていない子どもの家庭であっても子育て相談や各種催しに親子で参加できる。

また、就労などにより、家庭で保育ができない保護者に代わって保育してもらおう認可保育所（公立）は1施設で、幼児期の教育を行ってもらおう幼稚園（公立）が2施設あり、待機児童はない。

このうち、認定保育園と保育所には、保育教諭や保育士をはじめ、保健師や看護師が職員として常勤。ふだんは保育業務を行うが、子どもの具合が悪い場合などの病児保育に対応しており、保護者が安心して子どもを預けられるよう配慮されている。

また、家庭で一時的に保育ができない乳幼児の一時預かり事業が行われているほか、保護者の疾病や疲労、精神上などにより家庭で子どもを養育することが困難な場合、7日以内の短期間だけ養育してもらえる児童ショートステイ事業が展開されている。

訪問型病児保育事業としては、事前申請（月会費3千円）により会員登録した家庭で、子どもが朝に突然発熱（かかりつけ医の受診が必要）した場合など、保育スタッフが会員の自宅を訪問して保育するなどのサービスが行われている。

市内の中心部で南海電鉄の高石駅前に整備され、スーパーやショップ、図書館、マ

ンションなどで構成されているアプラたかいし内の子育てウェルカムステーションHUGOOD TAKAISHIは、子どもを一時預かりしてもらえる施設。保護者が買い物している間など、保育士が子どもを預かってくれる。

2 所感

当市の子育て環境において課題でもある病児保育について、看護師を職員として常勤させて対応するなど先進的に取り組んでおり、保育環境が充実していると感じた。

また、携帯電話を利用したの子育てイベントなどの情報発信や冊子「パパママ応援ブック」の提供など、子育てに関するきめ細やかな情報を提供しており、子育て環境の充実を図ることで、ここ数年の出生数の増加につながっていることを実感しました。

「子育てするなら、高石市」のキャッチフレーズらしく、官民一体での子育て支援の各施策展開が大変参考になった。

○海南市

1 子育て支援アプリ「すくすく海南」について

和歌山県北部の沿岸部に位置する人口約5万1千人の海南市。四季を通して温暖な気候で、南部地域ではミカンやビワ、東部地域ではモモの栽培が盛んで、紀伊水道を臨む沿岸部ではシラスやハモなどの海の幸に恵まれている。紀州漆器の産地でもある。熊野古道が南北に通る、古くから交通の要衝となっている。

総務省所管の平成28年度補正予算による補助事業「ICTまち・ひと・しごと創生推進事業」を活用し、子育て支援に関する複数の機能を備えたアプリケーションを開発した。具体的には、携帯電話のスマートフォンなどから子育てに必要な情報をワンストップで取得し、利活用できる。

アプリケーションの内容は、「母子健康情報（電子母子健康手帳）機能」「お知らせ配信プッシュ機能」「子育て支援情報ナビ機能」「施設マップナビ機能」「イベント情報ナビ機能」「保育施設空き情報ナビ機能」「緊急情報ナビ機能」。

近年、急速に普及しているスマホを活用し、各種子育て情報を提供している。中でも、電子母子健康手帳機能は、母親の妊娠中の体重や胎児の身長、体重を登録することで子どもの発育曲線グラフをいつでもスマホを使って見ることができる。また、子どもの成長記録を写真付きで残せるほか、乳幼児の各種健診や予防接種などの情報を

得ることもできる。

総事業費は約1千万円で、ほとんどがシステム開発費。このほかに年間の維持管理費として160万円ほどかかっている。平成29年12月からシステムを稼働させ、今年3月末までに78件が登録。市内の出生数が年間約300人あるが、当初見込みよりもアプリ登録数が伸び悩んでいるという。

その理由のひとつが、アプリ利用の開始にあたって同市の市役所窓口を訪れてID（利用者を識別するための符号や番号）を取得しなければならないなど、登録手続きが面倒な点が挙げられる。また、マイナンバーカードを持参した上でのID取得も利用者から敬遠されている要因となっている。

しかし、この事業は国のマイナンバーカード普及を狙いとした補助事業であり、同市の担当者は「市内でマイナンバーカードがそれほど普及していない現状がネックになっている」と話していた。

2 所感

携帯電話のアプリに母子健康手帳の機能を持たせるなど、とても先進的な取り組みに感心した。本市でも震災によって母子健康手帳を流出した家庭が多く、将来的な導入に向けて検討していく必要性を感じた。

しかし、アプリが気軽に使えるような仕組みづくりやマイナンバーカードの普及状況、アプリ作成の初期投資、維持管理費、個人情報保護など課題も多くあると感じた。

○稲むらの火の館

1 防災教育について

和歌山県有田郡広川町にある「稲むらの火の館」は、地域交流センター・濱口梧陵記念館と津波防災センターが併設されている。記念館は大津波から多くの人々を救った濱口梧陵の生家で、その生い立ちから晩年までの足跡を紹介。防災センターは津波の恐ろしさについて学べるほか、災害時の一次避難所となっている。

梧陵は、醤油醸造業（現・ヤマサ醤油）を営む濱口家の7代目として生まれた。1854年（安政元年）11月5日の夜、安政南海地震の津波が村を襲った際、自身の田んぼにあった藁（ワラ）に火をつけさせ、人々を安全な高台へ避難させるために導く灯りと

し、多くの命を救ったことで知られている。

このことをもとにつくられた物語が「稲むらの火」。原作は小説家の小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）で、翻訳されたものが文部省の国定国語教科書（国語読本）に掲載されたこともあり、防災教材として高く評価されている。

今では、国連がこの11月5日を「世界津波の日」に制定している。

さらに、梧陵はこの津波後、私費を投じて海岸沿いに高さ5メートル、幅20メートル、長さ600メートルの堤防（現在は国指定史跡）を整備。1946年（昭和21年）に発生した昭和南海地震津波の被害を食い止めた。

2 所感

施設の見学と梧陵が整備した堤防周辺の海岸部を視察し、より防災意識が高まり、防災・減災に向けた施策の参考になった。東日本大震災津波だけでなく、過去の大津波についても後世に伝えていくことが大切だと感じた。

しかし、海岸から近い場所に設けられた堤防の背後地に町役場や家が建てられ、道路幅が狭い現状に、有事の際の避難など、先人の津波の教訓が活かさたまちづくりが行われてきたのか疑問を感じた。

だが、平日の入館者数が600人を超えており、発信方法や運営の在り方は、津波伝承施設を整備する本市にとって、何かしらの資源に繋げられる可能性が高いと感じた。

○和歌山県立自然博物館

1 自然をテーマとした生物並びに標本の資料展示等について

和歌山県立自然博物館は、県内の豊かで美しい自然や生き物を楽しく学ぶ博物館となっている。第一展示室は水族館コーナーで、県内に棲む生き物を水槽に展示。第二展示室は標本が中心のコーナーで、動植物や昆虫をはじめ、化石、鉱物などが紹介されている。

水族館コーナーでは、水量約450トンの大水槽をはじめ、100個ほどの水槽で約550種6,000点の水生物が展示。潮の満ち干が観察できるスペースもあり、ウニやヒトデなどに直接触れることができるよう工夫。学習面を重視した施設で海岸の磯や岩場にいる雰囲気味わうことができ、訪れた子どもたちの人気を集めていた。

このほか、約2,000点の動植物や昆虫、貝、化石、鉱物などの標本が展示されてい

た。

2 所感

博物館といっても海岸に隣接した場所に整備されていることもあり、水生生物の展示が充実しており、水族館とのイメージが強い施設であると感じた。

施設内では地域固有の生物や動物を詳しく紹介するなど、標本の展示方法に工夫が見られ、大変参考になった。

今後、陸前高田市も博物館を新たに整備することになっており、標本の展示方法など、大いに参考となった。また、本市には震災前に海と貝のミュージアムがあっただけに、新たな博物館に水族館を併設させる方法を将来的な構想として模索していてもいいのではないかと感じた。